イスラエルのシリア攻撃とそれが中東地域に対して持つ意味

ロバート・インラケシュ著、脇浜義明訳、パレスチナ・クロニクル、２０２５年１２月１０日

イスラエルの空爆がシリアのベイト・ジン村を標的とした。(Photo: via SANA news agency)

イスラエルはシリア内戦後の新政権との蜜月が終わり、シリア国内での軍事活動と諜報活動を拡大する意向のようだ。

シリアの内戦でイスラエルは米国とともに反乱軍を支援し、２０２４年１２月にアサド政権が崩壊してから、イスラエルはシリア南部に４００平方キロメートルの領土を確保し、自由にシリア内を爆撃し、侵攻しているが、同時に新政権の高官と直接会談もしている。しかし、新シリア国は、地域と世界の国々が自分たちの利益を引き出すために競い合っている中心地になりつつある。

イスラエル軍のシリア侵攻は、領土獲得のための大きな戦闘もしないで、かつてないほど多くの土地を占領した。侵攻への抵抗は、唯一地元民の散発的な抵抗で、待ち伏せ攻撃か何かの爆発物を投げつける程度である。新政権アフマド・アッシャラア政府は、２０２５年7月にイスラエル軍が空爆して国防省を破壊し、数百人のシリア人を殺害したのに、報復の脅しすらしていない。新政府は、イスラエルと戦う気がないこと、さらにイラン、ヒズボラ、その同盟者を共通の敵だとする姿勢を明確にしょうとしている。

新政府のそういう姿勢にもかかわらず、イスラエルはシリアの内部宗派紛争に介入し、南部のドゥルーズ派分離主義民兵に武器を提供し、イスラエルが占領している地域と南部のスウェイダを結ぶランドブリッジの設置を要求している。イスラエルが何かと口実をつけて空爆し、シリア指導部を脅迫している。

イスラエルの変身

以前は、イスラエル政府はシリア新政府といわゆる安全保障協定を結ぶ姿勢で、何度か交渉したが、途中で交渉をやめた。交渉の中で、シリア新政権は最初から自分たちの力を放棄しイスラエルに対して弱腰だったので、当然イスラエルは最大限の要求を突きつけ、イスラエルの占領とシリア国内における行動の自由を「合法化」する協定を求めた。

イスラエル軍はしばらくの間シリア戦線からの脅威はないと思って行動していた。何しろ内戦でシリアの戦略兵器のほとんどが破壊され、シリア陸軍（SAA)は解体し、新政府アッシャラア政権が米国に依存していることが明らかになったからである。アッシャラアが米国の機嫌をとるために、米中央軍の幹部とバスケットボールに興ずる以上のことをしなければならないことを知っていた。シリア政府は米軍が危険と見做す人物やグループを弾圧し、ヒズボラへの武器輸出を取り締まり、パレスチナ抵抗勢力がシリアからイスラエルへ潜入するのを防いで、イスラエルへの脅威を排除した。

時が経ち、シリア経済が悪化した。失業率は６０％以上、貧困率は９０％近くと推定される。「シャドゥ・ガバナンス」による汚職が蔓延している。改善の努力はあるのだろうが、かつてアッシャラアの側で戦った反乱グループ、シャルム解放機構（ハヤット・タハリール・アッシャルム）の民兵などの諸々のグループの不満が増大するばかりである。

シリア政府とイスラエルの交渉が決裂すると、イスラエルのシンクタンク、政治家、メディアの談話はシリア政権批判へ傾いた。レバノンとシリアの北部戦線を専門的に扱うシンクタンクの「アルマ」は、シリア政府の弱体化を論じ始め、いつ崩壊するか分からないと予測した。

１２月８日、一部のシリア人がバシャール・アル・アサド政権の崩壊の１周年記念を祝うデモを行っていたとき、「アルマ」は新しい論文を発表した。それは、シリア指導者は、政権獲得以降の外交を、「西洋プラグマティズム」ではなく「ジハード主義プラグマティズム」で説明していると論じたものだ。「アルマ」は、アッシャラアの米国とイスラエルへの接近はアルカイーダの長期的策略の一環だと論じた。

まさかと思う人がいるかもしれないが、アッシャラアの戦略を分析してイスラエルはシナリオをひっくり返して、シリア大統領の過去をシリア侵略を正当化する手段として使うべき時だと判断したと理解できるだろう。

明確にするために述べておくが、アルカイーダの考え方に傾倒する過激グループはたくさんあり、その中には新シリア政権の軍事機構の中に入っているものもいる。アッシャラア自身も過去に ISIS とアルカイーダの幹部だった経歴がある。しかし、秘密のアルカイーダ策略に関する議論が成り立たないのは、米国もイスラエルもシリア大統領に踊らされたという主張を裏付ける証拠は何一つないからだ。

こんな論理に基づいて戦争を決定する政府なんて存在しない。だから、これはプロパガンダかもしれないが、「アルマ」の主張はイスラエル指導部の考えを反映していない。むしろ反対に、イスラエルはシリア内で戦術的優位性を確立しようとしており、シリア政権の打倒かまたは軍事的弱体化を予測している。

緊張激化

このイスラエルの新アプローチを促進している具体的要因がある。その一つがベイト・ジン村でイスラエル軍が待ち伏せ攻撃された事件である。この事件で多数のイスラエル兵が負傷し、シリア人約１３が死亡した。このため、イスラエルに抗議するシュプレヒコールのデモと集会が行われ、イスラエル国旗が燃やされた。１２月８日には、シリア軍の一部の部隊がガザを支援するシュプレヒコールをしている光景の映像が発信された。他にも、軍服姿の戦闘員が「ハイバル、ハイバル、ア・ヤフード」と叫んでいる映像が SNS で発信された。これは予言者ムハンマドが西暦６２８年に、当時ユダヤ教徒が支配していたハイバル（現在のサウジアラビアにあるオアシス）を包囲した戦いを思い起こさせるものだ。他の SNS 配信では、２０２３年１０月７日のハマス奇襲作戦で、パレスチナ人が使ったパラシュート・グライダーと同じものを使ってシリア戦闘員がダマスカス上空を舞う動画もあった。

これらの挑発的 SNS 動画はイスラエル国民の間に波紋を引き起こし、当局は軍事行動を示唆した。イスラエル政府のディアスポラ問題担当大臣のアミハイ・チクリは「戦争は避けられない」とＸで発信した。

シリア国民のイスラエルへの圧倒的な反感を反映した挑発的シュプレヒコールや動きにもかかわらず、イスラエルの侵攻に対するシリア軍の反撃の兆候は見られない。それでも、シリア国民は軍の反撃を期待している。

元駐米イスラエル大使のマイケル・ヘルツォークは、１か月前にワシントン近東政策研究所（WINEP)主催の会議で講演し、シリアの武装勢力がイスラエルの脅威になっているという懸念を語った。彼は、イスラエルは２０２３年１０月７日にガザ回廊周辺地区へのハマスの不意打ちを許してしまったが、シリアの武装グループに同じことをさせないと断言した。また、彼はトルコがシリアで果たしている役割を嘆いた。

イスラエルのシリア戦争？

シリア・イスラエル紛争の将来を考える際に先ず留意すべきことは、すでに戦争が始まっていることだ。ただ、イスラエルの勢力拡大が緩慢で、シリア側がそれに反撃していないだけだ。基本的には、シリアが攻撃され占領されており、その逆でないことが前提になる。シリア国には反撃し主権を守る権利があり、同じようにイスラエル軍の攻撃を受け、占領下で暮らしている人々で構成される独立民兵にも反撃する権利がある。シリアの武装グループが対イスラエル抵抗戦線を形成する可能性があり、その意志とそれへの国民的支持もあり、イスラエルが攻撃と占領を続ける限り、抵抗戦線形成は避けられないであろう。イスラエルの侵攻はこの現実を自分に押し付けることを意味する。

アッシャラア政府はイスラエル高官と直接話し合いするために、シリアの政治的伝統を破り、裏切り者と非難されることを厭わない。アッシャラアはイスラエルとの戦争を避けたい意向を示しているが、必ずしもその選択の道を続けることはできないだろう。彼の支持率は、支配層の中ではまだ高いけれども、国民レベルでは確実に低下している。敵も多く、彼の支配下にあるはずの武装勢力を完全には統制できていない。彼の政権弱体化という現実は、この１年間、シリアを何度も危機状態に追い込んだ。

つまり、イスラエルが侵攻をエスカレートし、シリアの武装勢力が反撃した場合、アッシャラアはイスラエルの好戦的行動に対抗する勢力を抑えることはできないだろう。その場合、イスラエルはお家芸の暗殺で、シリア指導者を標的殺害するかもしれない。そうすると、シリアの権力闘争となり、派閥間の流血市街戦や、各地で報復攻撃の連鎖の嵐が荒ぶことを、イスラエルは承知している。空爆による殺害でなく、地上で標的殺害するであろう。

シリア大統領殺害の後権力闘争が激しくなったら、イスラエルはより深くシリアへの侵攻を進めるだろう。主要目的はダマスカス郊外に占領地を拡大し、スウェイダヘランドブリッジを開通させ、シリア首都にイスラエル国旗を立てることになるだろう。シリアが内部紛争で混乱すれば、その目的は大した抵抗もなく達成され、イスラエル政府の大勝利となるであろう。

この文章を読んで、何故シリア政府は事態の先を読んで、イスラエルに対応する政策をとらないのかと疑問に思う人がいるかもしれない。しかし、仮にアッシャラアにそうする意思があると仮定しても、彼は自分が常にスパイによって取り囲まれていることを知っている――CIA、モサド、MI6、その他の諜報機関やスパイが彼の一挙一動を監視しているのだ。つまり、イスラエルはいつでも簡単に彼の首をはねることができるのだ。

シリア新政府の指導者は反乱に成功した後直ぐに米国、英国、西側諸国と同盟を結んだ。つまり、新シリア国は誕生から主権維持が不可能だったのだ。何しろ西側諸国はシリアの政権交代に何十億ドルの大金を注ぎ込んできたのだ。彼らはバシャール・アル・アサドの独裁的国内政治を懸念したからではなくて、アサド政府がイスラエルに敵対する勢力やイランと同盟していたからである。

また、もう一つ明らかにしておかねばならないのは、米国はシリアのクルド人のことを心配したことはないし、イスラエルはシリア内のドゥルーズ派を心配したわけでもなかったことだ。西側諸国の政府はシリア内の少数民族のことを気に掛けていないことを、はっきり指摘しておきたい。米国は、アサドの反対派を抑留する過酷な施設、人権侵害、汚職などを批判して政権交代を支援したわけでもないし、資金と武器で支援した過激派反乱グループの懸念を共有したわけでもなかった。米国高官が「我々はシリアでアルカイーダと共闘している」と言ったが、それは米国がサラフィー主義的カリフ制国家の樹立を目指したためではない。

米国はイスラエルの安全保障と中東地域に対する覇権維持という野心を最優先した。この姿勢はとりわけトランプ政権に当て嵌まる。トランプは、イスラエルがシリア支援をやめる時機だと決めれば、直ぐにスイッチを切り替えて、アッシャラアとの蜜月をやめ、彼をテロリスト ISIS 戦闘員と呼ぶだろう。米国のメディアも右へ倣えするだろう。これまで反乱の成

功を誉めていた論説はすべてアルカイーダ政権の批判論説に変わるであろう。米国はシリアの現状をよく知っており、米諜報機関はシリアをやっつけるために必要な情報をイスラエルに提供するだろう。

唯一の事態収拾への希望は、トルコの関与で、イスラエルが引き起こすかもしれない混乱を抑止するかもしれない可能性である。現在トルコはシリアに大きな関心を寄せていて、両国の国境の安定化を目指し、シリアに関してイスラエルとの競争に勝利しようとしている。トルコの関与がイスラエルへのブレーキとなっている。トルコの関与がなければイスラエルはもっと緊張を高めていたであろう。